

ヴィラモヴィアン語における主語の省略に関する一考察¹⁾

下 村 恭 太

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿ではポーランド南部のドイツ語系危機言語であるヴィラモヴィアン語における主語が省略される現象に着目し, その生起傾向の記述を目的としている。本分析の結果, 標準ドイツ語やドイツ語諸方言とは異なり, 形式代名詞を使用する場合や等位接続詞を用いる場合に主語が省略される頻度が低いということが明らかになった。特に, 後者に関してはヴィラモヴィアン語の先行研究とは異なる結果が得られた。さらに, 本調査からヴィラモヴィアン語における主語の省略は先行研究で述べられている動詞の屈折形態の明白性に依拠するのではなく, むしろ語用論的な要因によって生じる傾向が示唆された。

キーワード: 主語の省略, ゼロ主語, ドイツ語方言学

1. は じ め に

本稿ではポーランド南部のシロンスク県 (po. Województwo śląskie) に位置するヴィラモヴィツェ (Wilamowice) で話されるヴィラモヴィアン語を調査対象とし, 主語が省略される現象 (subject ellipsis, null subject) の出現傾向について調査し, 記述することを目標とする。

ヴィラモヴィアン語はビエルスコ・ビアワ言語島 (eng. Bielitz-Biala language enclave) の一部をなし (cf. Wicherkiewicz, 2003, pp. 6-7; Andrason & Król, 2016, p. 8; Andrason, 2021, pp. 4-5), かつてこの地域でドイツ語系の変種が広く話されていた。しかし, 第二次世界大戦後の強制移住により, この地域のドイツ語系変種の話者の大半がこの地を去った (cf. Wicherkiewicz, 2003, p. 11)。

ヴィラモヴィアン語がこの地域で話されるようになった背景には, 13 世紀の東方植民によるドイツ語話者の入植が関連している (Wicherkiewicz, 2003, p. 9)²⁾。さらに, 東方植民

によって形成された言語という点において, また, ドイツ語諸方言を区分する際の基準となる第二次子音推移の影響度合いがシレジア方言と類似しているといった歴史的経緯や言語学的特徴から, ヴィラモヴィアン語は東中部ドイツ語方言群に分類される³⁾。

現在, ヴィラモヴィアン語を流暢に話す話者は極めて少なく, 2020 年までの研究では話者数がおよそ 3-40 人であったとされるが (Louden, 2020, p. 816; Mętrak, 2019, p. 11), 執筆者が 2023 年に実施したフィールド調査によると, その数は 10 人未満であり, その大半は高齢者であった。それゆえ, ヴィラモヴィアン語は消滅の危機に瀕しているといえる。一方, このように話者が減少していく中で, 2000 年以降の言語復興活動により, ヴィラモヴィツェ在住の若者世代を中心に 10-20 名ほどのヴィラモヴィアン語を流暢に話す, いわゆるニュースピーカも誕生している (cf. Wicherkiewicz et al., 2018; Król, 2022)。

上述のように話者数がわずかとなった背景には, 第二次世界大戦後の迫害や法的にヴィラモヴィア

ン語の使用が禁止されたことに起因する。戦後、ヴィラモヴィアン語の使用とヴィラモヴィッツェの民族衣装の着用が禁止され、違反者は罰せられた (cf. Wicherkiewicz, 2003, p. 15)。そのため、話者は言語使用の複雑化に子供を巻き込むことを避けるため、家庭内でのヴィラモヴィアン語の使用を控え、コミュニティ内でのみ使用するようになった (Neels, 2016, p. 118)⁴⁾。この状況は共産主義解体期まで続き、その結果、当時子供であった現在の中高齢者層はヴィラモヴィアン語を話せないということになった (Neels, 2016, p. 118; Wicherkiewicz et al., 2018, p. 182)。つまり、ヴィラモヴィアン語は次世代への伝承がなされず、現在の少ない話者数となった⁵⁾。

ここで本稿の構成について言及する。次章では標準ドイツ語、ドイツ語諸方言、ヴィラモヴィアン語における主語の省略についての生起傾向を概観し、3章では、分析対象の資料と分析基準、そして分析結果とその考察について述べる。最後に4章では、本調査をまとめる。

2. 先 行 研 究

2.1. 標準ドイツ語とドイツ語諸方言における主語の省略傾向

主語の省略は動詞の活用形態から主語が特定できるスペイン語やイタリア語、あるいは談話や文脈から主語が特定できる日本語や中国語などで観察される (cf. Camacho, 2013, pp. 32-33; Cognola & Casalicchio, 2018, pp. 2-3)。

例えば、ヴィラモヴィアン語に影響を与えるポーランド語は主語の省略が無標である *pro-drop* 言語と呼ばれている。なぜなら、スペイン語やイタリア語のようにポーランド語の動詞の活用形態は主語の人称と数によって区別されることから主語が明示的であり、それゆえ、省略が容認される (Ruda, 2015, p. 4)。

標準ドイツ語に関しては、一般的に主語の省略は認められないとされている。

ところが、標準ドイツ語でも一定の条件下で省略が容認される (Weiß & Volodina, 2018, p. 263)。例えば、(1) a が示す非人称受動文で生起する形

式主語 (3 人称中性単数 *es*) は主文で動詞が 2 番目に生起することから前域を埋める必要があり、それゆえ、意味を持たない形式主語が生起する。その一方で、(1) b が示すように他要素 ((1) b では前置詞句) が前域をすでに埋めている場合には形式主語が前域に置く必要がないために省略される⁶⁾。

- (1) a. *Es wurde auf der Hochzeit
it.PRON.3NSG was at the wedding
viel getanzt.
much danced*
「結婚式では多くの者が踊っていた」

- b. *Auf der Hochzeit wurde (*es) viel ge-
tanzt. (Weiß & Volodina, 2018, p. 263)*

さらに、等位接続詞 *und* ‘and’ を使用する際に後続する主語が同一の場合にも省略が認められる (Weiß & Volodina, 2018, pp. 263-264; Duden, 2022, pp. 198-199)。

- (2) *Peter kommt früh heim und _⁷⁾
Peter comes early home and ø.3MSG
sieht den Nachbarn vor der Tür.
sees the neighbor in front of the door*
(Weiß & Volodina, 2018, p. 265)

「ピーターは早く帰宅すると、ドアの前で隣人を見かける」

以上の傾向に加えて、標準ドイツ語においても口語やドイツ語諸方言では主語が特定できる場合に節の文頭で省略が容認される⁸⁾ (cf. Trutkowski, 2016, pp. 9-12; cf. Rosenkvist, 2018, pp. 287-288; cf. Weiß & Volodina, 2018, pp. 263-264) :

- (3) *_ habe/hast gestern zu
ø.1SG/2SG have yesterday too
schnell aufgegeben.
fast gave up*

「(わたしは/きみは) 昨日あまりにも早くに諦めた」 (Weiß & Volodina, 2018, p. 264)

また、一部のドイツ語諸方言において主節内の定動詞の直後、従属節では2人称単数が主語となる場合に省略が認められる (cf. Rosenkvist, 2018, pp. 288-289; cf. Weiß & Volodina, 2018, p. 275). このような条件下では、動詞の活用語尾が他の人称や数と重複しない2人称単数であるために省略が容認される。ちなみに、(4) a が示すような補文標識の屈折現象が確認されるバイエルン方言や西フリジア語などのゲルマン諸言語・諸方言で2人称単数代名詞の省略が観察される (cf. Weiß & Volodina, 2018, pp. 274-275).

(4) a. Wenn-sd⁹⁾ _ mogst
if.CONJ-2SG ø.2SG want
「君がそうしたいなら」
(バイエルン方言)
(Weiß & Volodina, 2018, p. 275)

b. Vielleicht merksch _ plötzlich
maybe notice.2SG ø.2SG suddenly
nix mee.
nothing more
「もしかすると、急に君は何も感じなくなるかもしれない」¹⁰⁾
(シュヴァーベン方言)
(Bohnacker, 2013, p. 267)

以上のように、標準ドイツ語では非人称受動文における形式主語の使用に際して文頭が他の語ですでに埋まっている場合や、等位接続詞で接続された二つの文の主語が同一である場合に省略が見られる。その上、ドイツ語諸方言では文頭および定動詞の直後や従属節において2人称単数が主語の場合に省略が容認される。

2.2. ヴィラモヴィアン語における記述

ヴィラモヴィアン語では、動詞の活用語尾や文

脈から主語を特定できる場合に省略が認められる (Andrason, 2021, p. 251). 動詞の活用語尾に関して、ヴィラモヴィアン語ではドイツ語のように強変化動詞と弱変化動詞でその形態が分かれており、1, 2 人称単数では他の人称と形態が重複せず、さらに、強変化動詞では3人称単数も形態が重複しない。これらの人称と数では主語の省略が容認される。以下に現在形の活用語尾と弱変化動詞 maha 「一をする」、強変化動詞 nama 「一を取る」を例に示す。

表1 動詞の活用語尾と動詞 maha, nama の現在変化

	弱変化		強変化		弱変化		強変化	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	ø	-a/n	ø	-a/n	mah	maha	nam	nama
2	-st	-t	-st	-t	mahst	maht	nymst	nant
3	-t	-a/n	-t	-a/n	maht	maha	nymt	nama

文脈から主語が特定できる場合、例えば (5) のように、疑問文に対して回答をする場合は主語が明らかであり、このような場合は主語が省略される (Andrason, 2021, p. 253).

(5) Kuma zy? - Ju, _ kuma!
come they.PRON.3PL yes, ø.3PL come
「彼らは来ますか」 — 「はい、(彼らは) 来ます」

次に、非人称文の場合にも主語の省略が認められる。Andrason は不定代名詞 mā ‘man’ 「人 (不特定)」が使用される例 (6) を挙げ、その省略が容認されることを示している (Andrason, 2021, p. 254).

(6) Yr kjuh kon _ bata.
In=the church can ø.3MSG pray
「教会でお祈りできる」
(Andrason, 2021, p. 254)

さらに、標準ドイツ語の等位接続詞 und に相当する ân/âna を使用する際、後続の主語が同一の場合に主語の省略が容認されることも述べられて

いる (Andrason, 2021, p. 251).

(7) Wün zy zyca än _ fercyla.
were they.3PL sitting and ø.3PL narrating

「彼らは座って話していた」

(Andrason, 2021, p. 251)

以上の傾向をまとめると、標準ドイツ語と同様に形式代名詞を使用する際や、等位接続詞を用いた際に主語の省略が観察され、さらに、動詞の活用形態や文脈から主語が特定できる場合にも容認される。Andrason は、ヴィラモヴィアン語では主語の省略が頻繁には見られず、基本的には人称代名詞が用いられると述べている (Andrason, 2021, pp. 254–255)。ただし、Andrason は当該現象に関して包括的に記述しているものの、書記資料を扱っていないことや、彼自身が所有する公開されていない録音データに基づいて分析しているため、実際に他の資料でも同様の傾向が見られるかは不明である。

3. 分 析

3.1. 分析対象、基準

まず、分析対象の書記資料には韻律やリズムの影響を受けない以下3つの散文資料を選定した。これらの資料には歌や詩も含まれているが、その部分は分析の対象外とした。

表2 分析対象の書記資料

著者・出版年	著書名	語数
Młynek (1907)	<i>Narzecze wilamowickie</i>	5,970
Majerska (2014)	<i>Wymysiöejer fibl</i>	2,026
De Saint-Exupéry (1943) = (2019) (以下 Król 2019)	<i>Der kliny Fjyšt.</i>	13,841

Majerska (2014), Młynek (1907) はヴィラモヴィッツェの歴史や逸話、そしてヴィラモヴィアン語をテーマとしており、Król (2019) は『星の王子さま』のヴィラモヴィアン語訳¹¹⁾である。

次に、音声資料について述べる。以下3つのウェブサイトにて公開されている合計約7時間分

表3 分析対象の音声資料

ウェブサイト	録音時間
<i>The Center for Research and Practice in Cultural Continuity (CRP)</i>	4:50:36
<i>Dziedzictwo językowe Rzeczypospolitej (DJR)</i>	1:17:23
<i>Ynzer špröh – Our language (YS)</i>	0:45:45

の音声資料を本分析の対象とした（書記資料の方では「…選定した」としているため）。

これらの音声データは2000年以降に録音された会話であり、インタビュー形式でヴィラモヴィアン語話者がヴィラモヴィッツェの歴史や日常生活について自由に語っている。最初は質問者の質問に答えるが、その後は話者自身がテーマを変えたり、関連するテーマに展開したりしているため、内容は多岐にわたる。

最後に、分析基準について述べる。標準ドイツ語の傾向を基に、①非人称動詞の主語 *es* が文頭以外でも現れるか、②等位接続詞を用いた2つの文の主語が同一であるとき、2つ目の主語は省略されるか、これらに加えて、ドイツ語諸方言とヴィラモヴィアン語の傾向に基づき、③主語の省略が文頭か定動詞の後や従属節内で生起するかという基準で分析を行った。

3.2. 分析結果および考察

まず、形式代名詞の生起傾向について述べる。以下表4は、書記資料と音声資料において文頭以外で使用される形式主語の省略の有無を示している。

表4 文頭以外での形式主語の省略の生起数と割合

	文頭以外	%
書記資料	0/93	0%
音声資料	31/272	11.4%

両資料において、主語の省略は限定的であり、とくに書記資料では主語の省略が見られなかった。ヴィラモヴィアン語では、3人称中性単数代名詞が形式主語として使用される場合は接語形が用いられ、音声資料において省略が確認されたうちの22例は、動詞 *ys* ‘is’ に続く場合であった。このことから、これは接語形 ‘s が同化したものと考えられる ((8) a)。その他、(8) b のように音韻

的な配列としては問題ないものの、省略がなされていたため、形式主語の省略は可能であることが確認された。また、(8) c では文頭の形式主語が省略されていたため、文頭が他の語で埋まっていた場合にのみ省略が容認されるわけではないことも明らかになった。

(8) a. Kald ys _ . (CRP: 2009-06-12_RHL)
cold is ø.3NSG 「寒いです」

b. No zājn _ nö elder
yes.PTCL are ø.3NSG still older
loūt.
people

「(話者の友人である H 氏が年上であることを述べた後) そう, (だから) まだ話者 (私) よりも年上のヴィラモヴィアン語話者が生きている」

(CRP: 2009-05-21_AZL)

c. _ wiöe à kaŕer.
ø.3NSG was a room

「(家に) 部屋があった」 (YS: LN_hist)

このように、ヴィラモヴィアン語では形式主語が使用される場合、文頭以外の位置に限らず、あらゆる位置で省略が可能である。なお、Andrason が挙げた不定代名詞 *mà* については、書記資料で 11 例、音声資料では 97 例確認されたが、いずれも 3 人称男性単数の接語形 *‘à* が生起していた用例であり、省略は確認されなかった。

表 5 接続詞 *àn/àna* を用いた場合の同一主語の 2 文目の主語の省略に関する結果

書記資料								合計
SG					PL			16/85
1	2	3M	3N	3F	1	2	3	
5/15	0/1	2/36	4/12	0/2	0/4	0	5/15	
音声資料								合計
SG					PL			17/73
1	2	3M	3N	3F	1	2	3	
10/18	0/4	2/15	3/9	0/1	0/9	0/1	2/16	

次に、等位接続詞を用いた際に同一の主語が現れる場合の主語の生起の有無について結果を示す。

音声資料における 1 人称単数の主語の省略頻度は 50% を超えていた。加えて、書記資料における 1 人称単数, 3 人称中性単数, 3 人称複数, および音声資料における 3 人称中性単数でも、およそ 30% の頻度で省略が見られた。

1 人称単数で専ら省略が観察されるのは、後述する生起位置に関する分析結果で述べるように、1 人称単数は話者自身であるため主語が特定しやすく、談話構造において同じ語の繰り返しを避ける手段として省略 (cf. 福地, 1985, p. 23) が用いられる傾向と一致する。さらに、主語の省略が容認されない英語においても、日記や SNS など特に 1 人称単数の主語が省略される (diary drop と呼ばれる) 類似した傾向が見られる (cf. Haegeman & Ihsane, 2001, p. 332; Trutkowski, 2016, pp. 192-193)。加えて、(9) a のように *àna* が続く、1 つの節に 3 つ以上の文が接続する場合には主語の省略がされやすいことも確認された。なお、(9) b は省略がされていない用例であるが、これらの相違点について明確ではない。

(9) a. Yhy koüft mer wo’h wuld,
I.PRON.1SG bought me what=I wanted

àna _ ging *àna* _ zoct.
and ø.1SG went.1SG and ø.1SG sat.1SG

「自分の欲しかったものを買って, (店を) 出て, 座った」

(CRP: AJHFJ_3XYB)

b. wen yh zyc bym tejš àn
when I.PRON.1SG sit at=the table and

yh ho à wiöemy jak.
I.PRON.1SG have a warm jacket

「わたしはテーブルにつき, 暖かいジャケットを羽織るとき」

(CRP: HRBL_IMDA)

書記資料において省略の頻度が比較的高かった

表 6 書記資料間における接続詞 *an/ana* 後の主語の省略分析結果

作品	1SG	2SG	3MSG	3NSG	3FSG	1PL	2PL	3PL
Młynek (1907)	4/4	0	1/2	0/1	0/1	0/3	0	1/2
Majerska (2014)	0	0	0/6	3/8	0	0	0	5/9
Król (2019)	1/11	0/1	0/27	1/3	0/1	0/1	0	0/5

1 人称単数, 3 人称中性単数, 3 人称複数においては, 書記資料間で異なる傾向が確認された。その結果を踏まえ, 書記資料における分析を表 6 では資料別にしてまとめた。

Młynek では 1 人称単数が 4 例中 4 例省略されたのに対し, Król では 1 例のみ省略されていた。1 人称単数については相違が見られなかったものの, 3 人称中性単数と 3 人称複数については Majerska でそれぞれ 3 例と 5 例省略が確認されており, これらの人称では, 前文に代名詞が生起している場合や, 3 つの節を接続している場合には省略される傾向が見られた。(10) a, b は前者の代名詞か名詞句かの違いを表し, (10) a が代名詞 (*ejs* ‘it’), (10) b が名詞句 (*à jung mākja* ‘a young girl’) を示し, (10) c は 3 つの文が接続している用例である。

- (10) a. *Ejs* bydankt zih
she.3NSG.NOM¹²⁾ thanked herself

myter koleżanka an —
with=the friend and ø.3NSG

ging roüs.
went out

「彼女は友人に感謝し, 出て行った」
(Majerska 2014: 34)

- b. *Y am troürikja hjewystöwył hot à*
in a sad autum evening had a

jung mākja gynüg, y dyham cy
young girl enough, at home to

zyca an śwoca fu Wymysiöejer cy
sit and talk about Wilamowian to

hühja, an s'ging uf
hear, and she.3NSG=went to

Wymysdiöf, wu zāj koleżanka wönt.
Stara Wieś, where her friend lived
(Majerska 2014: 34)

「ある悲しい秋の夕暮れに, 若い少女は家に座ってヴィラモヴィアン人について話を聞くことにうんざりして, 彼女は友人が住んでいる Stara Wieś に行った。」

- c. *Zej łjyta zih cyzoma, hüffa*
they study themselves together helped

yr wjytšoft an špejlta mytum
in=the farm and played with=the

eldera brüder fum Rüzü, Frana.
Older brother of=the Rüzü, Frana

「彼女達と一緒に勉強し, 農場の手伝いをし, そして Rüzü の年上の弟である Frana と一緒に遊んだ。」
(Majerska 2014: 34)

等位接続詞 *an* で結ばれた文の前文での主語が代名詞か否かについて, 代名詞の場合は 3 人称中性単数と 3 人称複数合わせて 11 例中 6 例が省略されており, 名詞句の場合に 6 例中省略は見られなかった。したがって, 前文が代名詞か否かという点は省略との何らかの相関関係がありうるものの, その原因は明らかではない。他方, (10) c が示すように, 3 文を結ぶ際の主語の省略については, すべてに主語を表示すると冗長になるため, これを避けることから省略されていると考えられる。

次に, 生起位置に関する分析について, ゼロ代名詞 *ø* の生起位置を直前の語彙を基準に分類し, 文頭で生起する (*ø* _), 動詞の直後に生起する (*V* _ *ø*), 副文で生起する (*C* _ *ø*), そして, その他の語彙の直後に生起する 4 つの基準とゼロ代名詞の人称と数に分けて表 7 にまとめた。

表 7 生起位置に着目した分析結果

書 記	1SG	2SG	3MSG	3NSG	3FSG	1PL	2PL	3PL
($\emptyset$)	2/254	0/53	0/25	1/19	0/15	0/12	0/6	2/63
(V_ $\emptyset$)	1/176	0/68	0/136	0/34	0/17	0/25	0/19	0/55
(C_ $\emptyset$)	1/164	0/44	1/162	1/10	0/14	0/11	0/19	0/68
その他	0/6	1/3	0/3	0/1	0	0	0	0/2
音 声	1SG	2SG	3MSG	3NSG	3FSG	1PL	2PL	3PL
($\emptyset$)	60/392	4/58	5/34	2/136	0/26	1/68	0/7	6/87
(V_ $\emptyset$)	1/427	2/302	0/116	3/191	1/80	0/174	0/56	1/355
(C_ $\emptyset$)	6/206	2/57	1/38	4/81	0/24	1/71	0/19	0/126
その他	6/48	1/7	0/10	0/44	0/12	0/16	0/6	0/17

音声資料とは対照的に、書記資料では全体で 10 例のみ省略が確認された。そのうちの 9 例は Młynek (1907) で確認されている。生起位置に関しては、両資料ともにすべての位置で主語の省略が認められ、特に文頭での生起が最も多く観察された。また、人称に着目すると、1 人称単数の用例が多く確認できた。この傾向は動詞の活用形態の明示性との関連性が予測できるものの、(11) c が示すように省略された 73 例のうち 23 例は 3 人称単数の形態と同形であるため、むしろ上述のように主語が話者自身と明白であることから文の冗長さを避けるために省略されると考えられる。文頭での生起については、情報構造における主題が占めており、1 人称が既知であるために主題の省略傾向と一致している。

この情報構造や談話構造という要因とは別に、音声資料における 1 人称単数の省略では、定型句のように用いられる (11) d の Wà nist ny 「分からない/全く分からない」や、(11) e の wa der ziöen 「あなたに言う (こう言える)」場合にも省略傾向が見られる。このような用例は文頭において 11 例確認された。また、音声的に同化しうる動詞 ho ‘have’ を用いる場合には、13 例の省略が見られた (11) f。

- (11) a. do fjem Hymmuł ana
that in front of=the heaven and
fjer dier ho
in front of you have.1SG $\emptyset$.1SG
gysyndigt ana ych byj schun
insulted and I am already

ny wat
not worth (Młynek, 1907, p. 39)

「私は天とあなたを前に罪を犯しました。
(もはや父上の息子と呼ばれる資格はありません。)[…]

- b. _ mü zihja.
 $\emptyset$.1SG must.1SG search

「探さないといけない」
(DJR: Kowalczyk i Tymek)

- c. Bo beser ys _ kliny
because better is $\emptyset$.3NSG little

kyndyn cy fjyn.
children to teach

「(息子がまだ幼い頃にヴィラモヴィアン語を教えなかった理由について尋ねられたことを話者は振り返り、その当時の状況では教えることが難しく、また、消滅しつつある状況を改善するためには、大人と比べ) 子供たちに (ヴィラモヴィアン語を) 教えることはより良いことだから¹³⁾」

(DJR: JGara_5)

- d. S'B wiöe sun dö lang ny,
the=B was already here long not,
_ wà nist.
 $\emptyset$.1SG know nothing

(YS: nusat_migration)

「B氏はここにしばらくいないので（来てないので）、分からない。」

e. Yh gej ejweron, — wa
I go everywhere ø.1SG will

der ziöen.
you say

「私はどこへでも行ける、あなたに言う
と。」

(CRP: HBP_7)

f. Bo yh ken'á wirklih ny,
Because I know=him really not,

— ho'á ny gyzan.
ø.1SG have=him not seen

「私は彼のことを本当に知らない、彼を
見たことがない」

(DJR: Kowalczyk i Tymek)

ドイツ語やドイツ語諸方言とは異なり、ヴィラモヴィアン語ではあらゆる位置で省略が見られる。確かに、ヴィラモヴィアン語の語順は標準ドイツ語やドイツ語諸方言と同様に V2 語順であり、従属節内では定動詞が最後に位置する特徴がある一方、ポーランド語の影響により異なる語順も多く見られる (cf. Andrason, 2020, pp. 719–720)。したがって、標準ドイツ語やドイツ語諸方言では、語順の制約によって主節における定動詞の直後や従属節における例えば従属接続詞の直後といった中域で省略は容認されないが、ヴィラモヴィアン語ではその位置でも容認される。すなわち、主語の省略は語順よりも主語の明示性という談話構造や言語外的な要因によって大きく影響されると推察される。

次に、資料間の差異について触れる。まず、音声資料と書記資料における相違については、音声資料とは対照的に書記資料では省略の頻度が低かった。これは、会話がその場で行われる音声資料では話者と聞き手間で主語が容易に特定できる

ため、伝達の際に労力の消費を抑えようとするコミュニケーションの経済性により、繰り返しの表現を省略していたと考えられる。他方で、書記資料ではその場で会話が行われていないため、主語をより明示的に表現しなければ誤解が生じる可能性がある。そのため、主語を明示する必要がある。ただし、Mlynek の作品は他の書記資料と比較すると主語の省略が容認されやすい傾向があった。その理由は、Mlynek (1907) が母語話者の話す内容を記述したものであり、話し言葉に近いジャンルであると考えられるためである。実際、Mlynek は学校の教員であり、その学校の生徒や生徒の両親、親族の助力を得て、この作品を記述した。

さらに、書記資料間の相違について、Mlynek と異なり Majerska, Król の作品は規範性がより強く表れており、音声的に聞こえないはずの *ys's* (動詞 *ys* 'is' の直後に形式主語の 's) や文頭で 1 人称単数の接語形 *h'* が必ず書かれていた。音声資料に付随していたトランスクリプトにも同様の記述がなされていたが、音声資料では発音されていなかった。すなわち、発音されなくても主語を書くことが規範化されていると考えられる。

4. 結 論

本調査では、書記資料および音声資料を対象に主語の省略現象についての傾向を記述し考察を行った。その結果、標準ドイツ語のようにある特定の条件下で必ず省略が見られるわけではなく、むしろ随意的に省略が認められることが示された。また、主語の省略が容認される位置に制限はないものの、主題になりやすい文頭の位置では比較的多くの省略が確認され、さらに、1 人称単数を主語とする場合に省略の頻度が比較的多く見られた。これらのことから、ヴィラモヴィアン語における主語の省略は、語用論的もしくは談話構造的な要因によって生じていると考えられる。他方で、等位接続詞の直後に高頻度で人称代名詞が生起していたことについては、資料間の差異が確認されたものの、一部の用例では前文の主語が代名詞か否か、3 文以上を接続しているか否かが省略の生起

と相関していると推察された。前者に関しては原因まで明らかにできなかった一方で、後者については文の冗長さを回避するための手段と考察した。これらの用例は資料ごとに偏りが確認されたため、データを増やし、その生起要因について解明する必要がある。

本稿で取り上げた現象については Andrason (2021) が記述していたが、その記述は彼の会話データに基づくものであった。そのため、その分析の対象外であった書記資料や音声資料を対象にし、同様の結果が得られるかどうかを調査した。その結果、Andrason の記述と大半の傾向が一致していたが、等位接続詞 *an/ana* 後の省略については、本調査であまり見られなかったことから、この点については異なる傾向が観察された。

最後に、本調査はヴィラモヴィアン語をドイツ語方言学の枠組みに基づいて分析を行った。しかしながら、ヴィラモヴィアン語がポーランド語の影響を受けていることも考察する必要があるため、言語接触を視野に入れてポーランド語との比較を通じて調査すること、また本稿で明らかにできなかった等位接続詞 *an* の後の省略条件の解明を今後の課題とする。

注

- 1) 本稿は JSPS 科研費 JP22J13605 の助成を受けたものである。
- 2) 入植者の具体的な出身地については、現在も特定されておらず、資料が不足しているため結論は一致していない (cf. Król, 2016, pp. 243–244)。しかしながら、現在のテューリンゲンなど中部地域のドイツ語話者が入植したとする説が優勢である。ヴィラモヴィッツェの起源に関する記述としては、まず Bukowski (1860) ではアングロ=サクソンの地を出自とする説、Latosiński (1909), Młynek (1907) では低地ドイツやオランダ地域を出自とする説が唱えられている。実際、ヴィラモヴィアン語最大の詩を書いた Biesik も同様に述べており、このアイデンティティは戦時中また戦後において重要な要素であった。
- 3) ドイツ語諸方言を区分する際、第二次子音推移 (zweite Lautverschiebung) の影響度合いが判断基準として用いられる。第二次子音推移とは、無声閉鎖音 /p/, /t/, /k/ と有声閉鎖音 /b/, /d/, /g/ の変化を指す。/p/, /t/, /k/ は破擦音 /pf/ <ph, pf>, /ts/ <z>, 摩擦音 /χ/ <kh, ch>, または語中

や語末で母音の後に現れる重子音 /ff/ <ff>, /33/ <zz>, /χχ/ <hh> に変化する。一方, /b/, /d/, /g/ はそれぞれ /p/, /t/, /k/ に変化する。このうち, /d/ から /t/ への変化はドイツ全土で見られるが, /b/ と /g/ が /p/ と /k/ へ変化するの, ドイツ南部のバイエルン方言やアレマン方言に限定される (cf. König, 1978, p. 63)。これに対し, /p/, /t/, /k/ からの変化に関しては地域差が /b/, /d/, /g/ よりも顕著に現れるため, ドイツ語方言学ではこの変化が注目される。ドイツ南部では, これらの閉鎖音が全て /pf/, /ts/, /χ/ に変化するのに対し, 中部地域では /p/ は保持され, /t/ と /k/ はそれぞれ /ts/ と /χ/ に変化する。北部地域ではこれらの変化がほとんど見られない。重子音 /pp/, /tt/, /kk/ も同様に /pf/, /ts/, /χ/ に変化する (cf. König, 1978, p. 63)。ヴィラモヴィアン語が分類される東中部ドイツ語では, 中部地域の特徴 (/p/ は保持, /t/ と /k/ はそれぞれ /ts/ と /χ/ に変化) を示しつつも, 語頭の /p/ は摩擦音 /f/ に変化している。したがって, 標準ドイツ語の語中および語頭の /pf/, *apfel* ‘りんご’, *pfund* ‘ポンド’ と /χ/, *ich* ‘私’ が東中部ドイツ語ではそれぞれ *appel*, *fund*, *ich* として現れる (cf. Putschke, 1980, pp. 474–475)。

- 4) 当時, 子供世代であった現地住民とのインタビューによると, 学校でヴィラモヴィアン語を話すと罰を受けるため, 子供達は自ら進んでこの言語を両親から教わることを拒絶していた。すなわち, ヴィラモヴィアン語を話すことに対する拒絶は, 両親の意志のみならず子供の意志によっても生じていた。
- 5) 言語の使用が長らく禁止されていたにもかかわらず, 文化的側面においては禁止令が發布されてから間もなく一定の自由が認められるようになった。たとえば, 民族衣装を着用して歌を歌うことが許可されたが, その歌詞はすべてポーランド語でなければならなかった。
- 6) 全ての形式主語が文頭に他要素が生起する場合に省略が容認されるわけではない。例えば, 天候を表す場合や与格が主語の役割を担う場合などでは前域と同様に中域でも形式主語 *es* が生起する。
 - a. *Es regnet heute.* / b. *Heute regnet *(es).* (逐語訳: a. *It rains today.* / b. *Today rains *(it)* 「今日は雨だ」)
 - c. *Es gefällt mir in Paris.* / d. *Mir gefällt *(es) in Paris.* (逐語訳: c. *It pleases me in Paris.* / d. *Me pleases it in Paris* 「私はパリが気に入っている」) (Fleischer & Schallert, 2011, p. 214)
- 7) 主語省略の研究での慣習に従い, 原文で省略された箇所を “_”, グロスに *ø* とその人称を明記する。
- 8) Weiß & Volodina は 3 人称も可能としているが, Rosenkvist は 1 人称および 2 人称のみと述べている。また, 標準ドイツ語においても文頭の形式主語の省略が可能とされている。

(Es) *Wäre auch zu schade um diesen schönen*

Käse. (逐語訳: (It) would also be too bad for this beautiful cheese. 「この美味しいチーズを無駄にするのが惜しいだろう」) (Meibauer et al., 2013, p. 37)

ただし, Weiß & Volodina (2018), Trutkowski (2016) は文頭の形式代名詞の省略は可能とされるが, その頻度は限定的であるとしている。

- 9) 従属接続詞 wenn, if と動詞の 2 人称単数の語尾 -st/-sd が融合している形態であり, ドイツ語諸方言やオランダ諸方言, 西フリジア語などで観察される。なお, 従属接続詞と人称語尾を明示するため, それらの境界に “-” を明記した。この記号は当該現象を中心に扱う先行研究における表記法に基づいている (cf. Fingerhuth & Lenz, 2021; Weiss, 2005)。
- 10) 和訳は Bohnacker の英訳 “Maybe (you) suddenly won’t feel anything any more.” に基づいている。
- 11) 筆者によれば, この翻訳は主にポーランド語とドイツ語のテキストに基づいて行われている。
- 12) ヴィラモヴィアン語ではしばしば 3 人称中性単数代名詞が女性を指す際に使用される。その際, 「若い」「親しい」女性である場合に中性代名詞が使用され, 「年上」「あまり知らない」女性に対しては女性の代名詞が使用される。
- 13) 話者は息子にヴィラモヴィアン語を教えたかったものの, 息子の幼少期ではヴィラモヴィアン語の使用が禁止されていたため教えられなかった。ただ, 話者も言語の伝承が必要と考え, その際に大人よりも子供にヴィラモヴィアン語を教えた方がよいことも自覚していた。

一次資料

- YS: Chromik, B., Król, T., Sullivan, J., Tomaszewski, J. & Maryniak, J. (2018). Ynzer spröh – Our language. [<http://ynzer-sproh.al.uw.edu.pl>] (accessed 29. 03. 2024)
- DJR: Dziedzictwo językowe Rzeczypospolitej. [<http://inne-jezyki.amu.edu.pl/Frontend/>] (accessed 29. 03. 2024)
- CRP: Król, T., Chromik, B., Hamann, A., Majerski, M., Majerska-Sznajder, J., Smolana, M., Sullivan, J., Sznajder, R., Szutow, P., Nowak, A., Zejma, M. (2020) Ufnama fu Wymsoü/Recordings from Wilamowice/Nagrania z Wilamowic. [www.culturalcontinuity.al.uw.edu.pl] (accessed 29. 03. 2024)
- Majerska, J. (2014). *Wymysiöejer fibl*. Warszawa: Warszawyßer Uniwersytet. Tal “Artes Liberales”.
- Młynek, L. (1907). *Narzecze wilamowickie*. Tarnów: Nakł. autora.
- De Saint-Exupéry, A. (2019). *Der Kliny Fjyßt* (Übers. T. Król, J. Maryniak). Warszaw – Wymsoü: Centrum for Füßnan än Praktyk yr Kultüryša Wetercijung. Tal „Artes Liberales”. Warszawyßer Uniwersytet. Gyzelsoft „Wymysiöejyn”.

参考文献

- Andrason, Alexander. (2020). Verb Second in Wymysorys. In R. Woods & S. Wolfe (Eds.), *Rethinking Verb Second*. Oxford University Press. 700–722
- Andrason, Alexander. (2021). *Polish Borrowings in Wymysorys* [PhD Thesis. University of Iceland].
- Andrason, Alexander and Król, Tymoteusz. (2016). A grammar of Wymysorys. *Durham: Duke University, SEELRC*.
- Bohnacker, Ute. (2013). Null Subjects in Swabian. *Studia Linguistica*, 67(3), 257–289.
- Bukowski, Jacob. (1860). *Gedichte in der Mundart der deutschen schlesisch-galizischen Gränzbewohner, resp. Von Bielitz-Biala*. Bielitz: Zamarski.
- Camacho, José. (2013). *Null subjects*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cognola, Federica and Casalicchio, Jan. (eds.). (2018). On the null-subject phenomenon. In *Null Subjects in Generative Grammar: A Synchronic and Diachronic Perspective*. Oxford: Oxford University Press. 1–28.
- Duden (2022). *Duden. Die Grammatik: Struktur und Verwendung der deutschen Sprache. Sätze – Wortgruppen – Wörter* (10th ed.). Berlin: Dudenverlag.
- Fingerhuth, Matthias and Lenz, Alexandra N. (2021). Variation and dynamics of “complementizer agreement” in German: Analyses from the Austrian language area. *Linguistic Variation*, 21(2), 322–369.
- Fleischer, Jürg and Schallert, Oliver (2011). *Historische Syntax des Deutschen: Eine Einführung*. Tübingen: Narr Verlag.
- Haegeman, Liliane and Ihsane, Tabea. (2001). Adult Null Subjects in the non-pro-drop Languages: Two Diary Dialects. *Language Acquisition*, 9(4), 329–346.
- König, Werner. (1978). *Dtv-Atlas Deutsche Sprache. Tafeln und Texte*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Król, Tymoteusz. (2016). Czym jest dla dzisiejszych Wilamowian język wilamowski? Różne funkcje, różne postawy językowe. *Łódzkie Studia Etnograficzne*, 55, 241–264.
- Król, Tymoteusz. (2022). Volkslista i powojenne prześladowania. Analiza opowieści wspomnieniowych Wilamowian z perspektywy folklorystycznej. *Wrocławski Rocznik Historii Mówionej*, 12, 120–140.
- Latosiński, Józef. (1909). *Monografia miasteczka Wilamowic: Na podstawie źródeł autentycznych: Z ilustracjami i mapką*. Kraków: Drukarnia Literacka.
- Louden, Mark L. (2020). Minority Germanic languages. In B. Richard, Page and Michael T. Putnam (eds.). *The Cambridge Handbook of Germanic Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press. 807–832.
- Meibauer, Jörg, Steinbach, Markus and Altmann, Hans. (2013). *Satztypen des Deutschen*. Berlin: De Gruyter.
- Mętrak, Marciej. (2019). Wymysorys (Vilamovicean)

- and Halcnovian: Historical and present-day sociolinguistic situation of microlanguages in a southern-Polish language island. *Slovani Od Preloma*, 19, 7–19.
- Neels, Rinaldo. (2016). Language and identity in Wilamowice: A complex history of language choices and language attitudes. In Justyna, Olko, Tomasz, Wicherkiewicz & Robert, Borges (eds.). *Integral Strategies for Language Revitalization*. Warsaw: University of Warsaw. 111–130.
- Putschke, Wolfgang. (1980). Ostmitteldeutsch. In Althaus, Hans Peter, Helmut, Henne & Wiegand, Herbert Ernst (eds.). *Lexikon der germanistischen Linguistik*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 474–479.
- Rosenkvist, Henrik. (2018). Null subjects and Distinct Agreement in Modern Germanic. In F. Cognola & J. Casalicchio (eds.), *Null Subjects in Generative Grammar: A Synchronic and Diachronic Perspective*. Oxford: Oxford University Press. 285–306.
- Ruda, Marta. (2015). Rich Agreement and Dropping Patterns: Pro-Drop, Agreement Drop, No Drop. *Proceedings of the 24th Meeting of Formal Approaches to Slavic Linguistics*, 321–341.
- Trutkowski, Ewa. (2016). *Topic drop and null subjects in German*. Berlin: De Gruyter.
- Weiss, Helmut. (2005). Inflected Complementizers in Continental West Germanic Dialects. *Zeitschrift Für Dialektologie Und Linguistik*, 72(2), 148–166.
- Weiß, Helmut and Volodina, Anna. (2018). Referential null subjects in German: Dialects and diachronic continuity. In Cognola, Federica & Casalicchio, Jan (eds.), *Null Subjects in Generative Grammar: A Synchronic and Diachronic Perspective*. Oxford: Oxford University Press. 261–284
- Wicherkiewicz, Tomasz. (2003). *The making of a language: The case of the idiom of Wilamowice, southern Poland*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Wicherkiewicz, Tomasz, Król, Tymoteusz and Olko, Justyna. (2018). Awakening the language and speakers' community of Wymysiöeryś. *European Review*, 26(1), 179–191.
- 福地肇. (1985). 『談話の構造』 東京：大修館書店.

A Study of Subject Ellipsis in Wymysorys

Kyota SHIMOMURA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This paper focuses on the phenomenon of subject ellipsis in Wymysorys, a Germanic endangered language spoken in southern Poland, with the aim of describing its occurrence. The analysis reveals that subject ellipsis occurs less frequently when expletive pronouns or coordinating conjunctions are used, unlike in standard German and other German dialects. Furthermore, the results show that subject omission is influenced by pragmatic factors rather than the explicitness of verbal inflectional morphology, as described in previous research.

Keywords: subject ellipsis, null subject, German dialectology